

# 佃のわたし

長谷川時雨

青空文庫



やみやみの夜更よふけにひとりかへる渡わたし船ぶね、残ざん月げつのあしたに渡る夏の  
 朝あさ、雪ゆきの日ひ、暴風雨あらしの日ひ、風趣おもむきはあつてもはなしはない。  
 平日なみひの並なみのはなしのひとつつふたつが、手帳てちょうのはしに残のこつて  
 る。

一日いちにちのはげしい労働ろうどうにつかれて、機械きかいが吐はくやうな、重おもつくる  
 しい煙けむりりが、石川島いしかはしまの工場こうじょうの烟突えんとつから立昇たつつてゐる。佃つくだから出  
 た渡わたし船ぶねには、職しやく工こうが多く乗のりつてゐる。築地はうの方はうから出  
 のには、佃島つくだへかへる魚賣うしうりりが多い。よぼよぼしたお爺おやさんの蜷し  
 賣うりりと、十二三じふにさんの腕白うでしろが隣となりりあつて、笹ささと笹ささをならべ、天秤棒てんべんぼう

を組あはせてゐたが、お爺さんが小僧の、不正な枿を見つけたのがはじまりで、

こんな狡こすいことをしてゐる、よく花客とくいが知らずにゐるな、と言つた。

俺は山盛りに賣るからよ、爺ぢいさんはどうする、と小僧は面白さうにきいた。

俺か、俺は枿これに一ぱいならして賣るのよ。

へん、客がよろこぶめい。賣れるか。

賣れねえ。

乗りあひの者は一時に笑つた、例いつもの通り船頭が口をだした。

小僧、三十錢から賣つたつて、家うちへは二十錢も、もつてけへる

めい、なあよ。

それはいけねえ。家でうち母親おふくろが當あてにしてゐるのだから、ちやんと持つてかへつて、二錢でも三錢でも氣きもちよくもらへ、と、おぢいさんは首をふつた。

十五錢もありや母おふくろ親は好いのよ。十錢買喰ひをしても、よけいに取れるから割が好いやな、と、も一人の船頭が言つた。

二錢ばかりの小遣なら、爺さんのやうに十錢も稼いでおかあ、なあよ。

違ひない、と皆はまた笑つた。小僧は筧に残つてゐたすこしばかりの蠅しづみを、河の中へ底を叩いてあけてしまつた。お爺さんは掌はたに河水をすくつて、筧の底に乾ききつてゐる貝へかけてゐる。傍

の若い者が調戲からかつて、

爺さんなよく毎日残つてゐるな、もう腐つてゐるだらう。河の中へ歸けへしておけよ、勿體もったいねえぢや困るぜ、と

鰯がはいつて來たな、と沖からはいつて來る漁船ふねを見て、一人が言つた。

兄あにい、寺は何處どこだい、御苦勞ご苦労だな、と棹をいれながら、船頭ふねが挨拶をした。

寺つて言へばよ、をかしいことがあるのよ、坊主なんて辛ひどいことをするぜ、尤も俺達も亂暴らんぼうにや違ひないが、去年よ小石川の寺て院いんでよ、初はつさんところの葬式そうしきの來るのが遅れたのでな、前まへへ行つ

てゐた者が、一盃いっぺいやり始めたのよ、すると誰かが外で、其處い  
 らには珍めづらしい新らしい鯛のを、見つけたといつて買つて來たのよ、  
 買つてくる奴も奴ぢやねえか、一盃機嫌だから、御本堂も何もあ  
 るものか、よからうと言ふので焼出したのよ、すると和尚め、よ  
 い匂ひですな、なんてやつて來やがつて、旨い漬物を出してよ、  
 よろしければおかはりをなさいましと來たのだ、どうです和尚おしやう  
 さん御ご一いっ緒しよになつては、と言ふとな、結構ですと言やがるんだ、  
 厭になつちまふぢやねえか、其處ですつかり仲間になつてやつて  
 しまふとな、佛を持つて來たのだらう、すると皆みんなが妙だ。妙だ、  
 變な匂ひがするつて、へツ、する筈だあな、線香で鯛の匂ひを消  
 さうと思やがつて、和尚おしやうが燻いぶしたてるんだ、たまらねえ。

呆れてしまふな、何宗だい。

何宗だか、俺おれの家の寺とこぢやねえもの知らねえや。

親鸞しんらんさま様は矢ツ張り豪えらいな。

さうともよ、末世まつせを見通しなされたのだ、あれほどのお方で妻

帯をなすつたのは、御自分の豪えらいを知つて、後のちの坊主どもが、

とてもそんな堅つくるしくしてゐられめえと、わざと御自分がみ

んなの爲に、ああなすつたのだとよ、豪えれいな、眼があるのだ、有

難い話ぢやねえか。

あしたの紅こうがんゆふ顔夕はつこつべに白骨となる、ほんとだ、まつたくだ、

南無阿彌陀佛と言ひたくならあな。

お前の家は何宗だつけな。



本願寺だ。

——當りますよ、大當り、と船頭は聲を張あげた。

雨の日に、年をとつた労働者が二三人、寒さうに顫へながら、小さな聲でこんな咄はなしをしてゐた。

金華山て何處だらう。

さうさな、ありや美濃だらう。

さうか、そこいな、大きな鯨が出て、大砲の弾丸を三發もうけたが、とうとう船に四よつたり人乗せたまま呑んでしまつたとよ。

はなしだらう。

さうでないのだ、信實まったくだとよ、新聞にあつたのだらう。

船と人が四人？<sup>よにん</sup> そんなに呑めるものかな。

呑めるんだらう、何しろ巨い鯨<sup>でかもの</sup>に違ひない。

でも美濃は山國だらう。

さうかな、ちつとをかしいな。

山國にしておけよ、俺の家の息が、<sup>やつ</sup>なんでも船乗りになつてゐるさうだ。

さうか、知らなかつた——ろくなことはないなあ。

好いことはきかせねいや。

伊豆通ひの漚船<sup>ふね</sup>が、漚笛<sup>きてき</sup>を低く呻吟<sup>うな</sup>らせて通り過ぎると、その餘波にゆられて、ゆらゆらしながら、

金華山は美濃だ、美濃はたしかに山國だ。

さうならお咄<sup>はな</sup>しだ。と言捨てて共に去つた。

明治四十年ぐらゐの京橋區佃島の住吉の渡しでの乗合衆である。

（「女子文壇」増刊附録）



# 青空文庫情報

底本：「桃」中央公論社

1939（昭和14）年2月10日発行

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2009年1月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

# 佃のわたし

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>